

# 興福寺

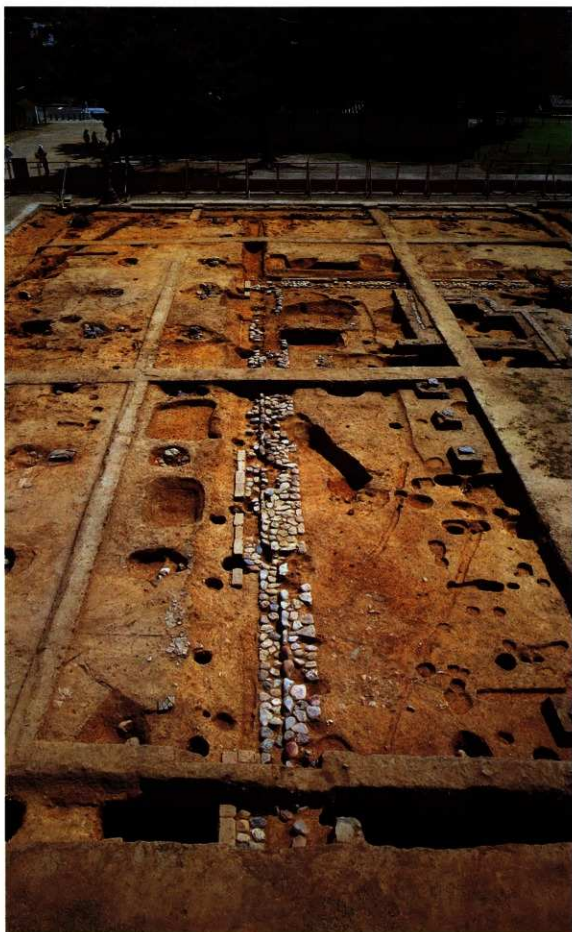
第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報Ⅳ



2002

興福寺





東面回廊西側の基壇外周と階段（北から）



調査区全景（東南から）



東面回廊基壇上の礎石採取穴  
（東南から）

# 序

平成10年10月、中門跡の発掘調査に着手して以来、興福寺では、中金堂前庭・中金堂基壇全面そして東面回廊と、中金堂院にかかわる発掘調査がつづいた。回廊は左右相似に構築されたであろうから、これでは、中金堂院の全面発掘を終えたといっても過言ではない。

各年度において、学術的にきわめて貴重な知見を得たことは、既刊の『第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報（Ⅰ～Ⅲ）』によって明らかであるが、本『概報Ⅳ』は、平成14年度に行なわれた東面回廊の東南部分の発掘調査による知見を報告するものである。

これにより、回廊の構造が明らかになったが、そのなか、東面回廊の中央に門が設置されていたこと、および、その規模が確認されたことは、大きな成果であろう。この門は東金堂の中心と一致するから、これによって当山伽藍構築の東西方向の軸線を確定したといえよう。このように今回も、奈良文化財研究所のご協力により重要な知見を得た。ここに、深く謝意を表す。

当山では、これらの発掘調査にもとづきながら、14・15年度において中門の基壇表示などを実施、数年後には、享保2年（1717）の焼失このかた悲願である中金堂の再建事業を本格化させる予定である。大方江湖のご理解とご協力をお願いする次第である。

平成15年2月

興福寺貫首 多川俊映

## 目 次

序	
目 次	
1 調査経過	3
2 中金堂院の歴史と空間利用	4
3 遺 構	6
(1) 回廊基壇上の遺構	6
(2) 基壇縁と外周の遺構	10
(3) 内庭部の遺構	14
4 出土遺物	16
(1) 瓦	16
(2) 土 器	18
(3) 銭貨・金属製品	18
(4) 石 材	19
5 回廊の柱間寸法と「衆門」	20
6 結 語	22
報告書抄録	24

## 例 言

1. 本書は興福寺第1期境内整備事業にともなう平成14年度発掘調査概要報告書である。
2. 調査は興福寺の委託を受けた奈良文化財研究所平城宮跡発掘調査部が、平成14年7月1日から平成14年11月1日にかけて実施した。
3. 調査は、井上和人・長尾充・今井晃樹・神野恵・山本紀子・山本崇が担当し、木本拳周（東海大学）、瀧口泰孝（近畿大学大学院）、月村達文（帝塚山大学）、長浦兼一（帝塚山大学）、中島陽（大阪市立大学大学院）、西川知秀（近畿大学）、西野摩耶（慶應義塾福沢研究センター）、登尾聡（大阪市立大学大学院）、矢倉嘉人（帝塚山大学大学院）が参加した。
4. 調査ならびに本書の編集にあたっては、文化庁、奈良県教育委員会、奈良市教育委員会、大阪市立美術館の協力を得た。
5. 本調査は、平城宮跡発掘調査部の平城第347次調査として実施したもので、各遺構には平城京左京における調査基準に従い一連の番号を付した。発掘遺構図等の座標値は、国土方眼旧第Ⅵ座標系による。
6. 本書の作成は、当調査部長・金子裕之の指導のもと調査員全員があたり、全体の討議をへて行った。編集は今井晃樹が担当し、各項は執筆を分担した。  
1・2 山本紀子、3・4-(1)・5・6 今井晃樹、  
4-(2) 神野恵、4-(3) 井上和人、4-(4) 長尾充
7. 遺構・遺物の写真は、牛嶋茂・中村一郎・杉本和樹が撮影した。
8. 本文中では「興福寺 第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報Ⅰ～Ⅲ」を「概報Ⅰ～Ⅲ」、「興福寺流記」を「流記」と略称する。

## 1 調査経過

本調査は、中金堂院の東面回廊・南面回廊と回廊内底部を含むL字型の調査区を設定し、981m<sup>2</sup>について調査をおこなった。

興福寺中金堂院では、1998年度に中門全面と、中門の東西に取り付く南面回廊の一部を含む841.5m<sup>2</sup>、1999年度に東面回廊の北半と中金堂前底部を含む1485m<sup>2</sup>、2000・2001年度に中金堂とその東西に取り付く北面回廊の一部を含む1836m<sup>2</sup>を発掘調査した。これまでの調査では、各建物の規模を明らかにし、基壇外装やその外周の遺構には数度の改修があることを確認した。

本調査では、中金堂院回廊東南部の様相を明らかにすることが課題となった。絵画資料や指図に描かれる東西の回廊に開く門の検出や、門の南北で異なると予想される桁行方向の柱間寸法の解明も期待された。今年度は、興福寺第1期境内整備事業にともなう中金堂院発掘調査の第5年度目にあたり、今回で中金堂、中門と回廊東半の調査が完了することになる。

発掘調査は2002年7月1日から開始し、11月1日に終了した。今回の調査では、東面回廊の南半と南面回廊東半の基壇や外周の雨落溝、石敷などを検出した。東面回廊基壇の西辺で回廊に取り付く階段を確認し、その位置から回廊に開く門の位置を確定した。回廊の内底部では、火災時に生じた廃棄物処理のための土坑や近世の建物遺構などを検出した。

第1表 調査経過

7月1日	現場設営、地区杭設定完了。東から発掘開始。
7月4日	礎石採取穴の検出開始。
7月5日	東面回廊棟通りで礎灰岩製地覆石SX7501を検出。
7月15日	仮設建物SH7336の西側礎石列を検出。
7月18日	内底部で建物SB8406を検出。
8月5日	南面回廊南側の溝SD8385の検出状況を写真撮影。
8月6日	東面回廊の礎石採取穴掘り下げ（～7日）。
8月8日	東面回廊西側の基壇外装、雨落溝、階段を検出。
8月13日	地上写真撮影。
8月21日	階段南辺地覆石の採取を検出。
8月22日	内底部の廃棄土坑を掘下げ。階段遺構を実測。
8月29日	記者発表。
8月31日	現地説明会。見学者約560人。
9月3日	クレーンによる調査区全景の写真撮影。
9月4日	地上写真撮影。
9月5日	平西実測開始（～9月24日）。
9月26日	断削（断面観察）開始。
9月30日	記録ビデオの収録。
10月2日	内底部で瓦敷地業SX8403を検出。
10月7日	東面回廊基壇上で掘立柱建物SB8365を検出。
10月11日	遺構の地上写真撮影。
10月25日	東南隅の礎石断削。
11月1日	調査終了。



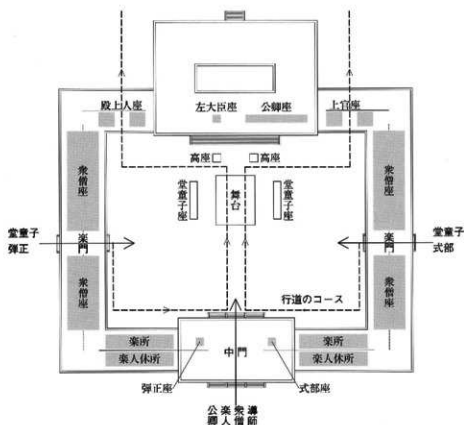
第1図 発掘調査区位置図(1:1500)

## 2 中金堂院の歴史と空間利用

**中金堂院の歴史** 興福寺は、藤原鎌足の夫人鏡女王が夫の病平癒を祈願して建立した山階寺を起源とする。672年の壬申の乱の後、都が飛鳥に遷ると山階寺は厩坂に移されて「厩坂寺」と称された。平城遷都により、厩坂寺も平城京に移り「興福寺」と号された。興福寺は藤原氏の氏寺でありながら、藤原京の弘福寺に代わって大安寺、薬師寺、元興寺とともに四大寺の1つにも数えられていた。

創建後、中金堂院は永承元年(1046)の火災をはじめ、計7度焼失の記録がある(永承元年(1046)、康平3年(1060)、永長元年(1096)、治承4年(1180)、建治3年(1277)、嘉暦2年(1327)、享保2年(1717))。古代中世の中金堂院は焼失のたびに再建を重ねてきた。近世には宝永4年(1707)に西回廊が倒壊し(『東大寺年中行事日記』)、享保2年(1717)に中金堂、回廊、中門を焼失する(『興福寺伽藍炎焼之記』)。享保14年(1729)には再建事始が行われたが復興は進まなかった。文政2年(1819)には平面規模を縮小した金堂仮殿が建てられたものの、中門、回廊は再建されなかった。

**回廊と「薬門」** 興福寺の回廊建物は、絵図などの記録によれば、梁行2間で棟通りに連子窓をいれた壁が通り、その両側が吹き放しとなる複廊の構造であった。東西回廊の中程には「薬門」が開いていた。『肝要絵図類聚抄』(15世紀、興福寺蔵)や『興福寺建築諸図』(17世紀頃、東京国立博物館蔵)所収の回廊平面図には、東西回廊のほぼ中央に「カク門」「扉」の記載がみられる。「薬門」の屋根は、絵画資料には回廊と一棟の構造に描かれることが多いが、『春日社寺曼荼羅』(大阪市立美術館蔵)では回廊より一段高くなっている(第22図3・4)。東面回廊の桁行方向の柱間が「薬門」の南北で異なっていたことは、『興福寺建築諸図』所収の回廊平面図に記された柱間寸法からうかがえる。



第2図 興福寺再建供養会 会場略図(『造興福寺記』『興福寺供養次第』をもとに作成)



法会にみる回廊と内庭部 中金堂院の回廊は、院内外を区画するだけでなく、内庭部から連続する空間として金堂、中門などと一連に利用されてきた。ここでは中金堂院の再建供養や『興福寺年中行事』に記された法会における回廊と内庭部の利用を概観してみたい。

興福寺再建供養会については、永承3年(1048)の供養を記した『造興福寺記』と、建久5年(1194)の供養を記した『興福寺供養次第』に詳しい。興福寺の再建供養会は、金堂だけではなく内庭部や回廊も利用する「庭儀」の法会であった。金堂の前には、法会進行の中心的な役割を担う導師が座る「高座」が置かれ、その南には「舞台」が設けられた。舞台には香炉などをのせる机や舞人の座があり、僧侶が境内を巡る儀礼である「行道」の時の通路にもなった。内庭部は、儀式活動の中心の場となっている(井上光夫『日本建築の空間』鹿島出版会、1969年)。

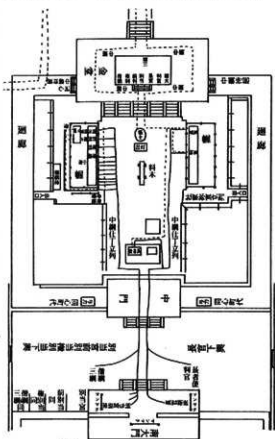
この時、中門から中金堂につながる回廊は通路として利用されない。回廊には、法会に参加する衆僧の座や、儀式の際に音楽を奏する楽所が置かれた。永承の供養会の時には、東西廊の蓮子などを取り払い、衆僧たちの座る腰掛を置いている。中金堂院から僧房をめぐる行道のときにも、降雨の際に行われる「雨儀」で回廊の基壇上を通路とする場合を除いては、基壇を降りて回廊の「廊」に沿って内庭部を行道している。

儀式の際に中金堂院内に入場する門は、参加者の身分や役割によって異なった。導師、呪願師、衆僧、楽人、公卿など法会の参加者のほとんどは、中門から中金堂院に入場する。一方、式部省・弾正台の官人や、堂童子をつとめる四位五位の官人は、東西廊に開く楽門から入場する。また、法会の行道時には、衆僧たちが楽門の位置で基壇を昇降して東西廊の壇上の座と内庭部とを出入りした。

『興福寺年中行事』に記された法会でも、中金堂院の利用を見ることができる。『興福寺年中行事』

は、鎌倉時代の興福寺の法会や行事を月ごとにまとめた記録である。中世興福寺における主要な法会は「十二大会」と称されており、年中行事はこれら十二大会を中心に構成されていたと考えられる(高山有紀『中世興福寺維摩会の研究』塙書房、1990年)。室町後期の『尊尊御記』によれば十二大会のうち報恩会、常楽会、法華会、仏生会、千部会が金堂で行われた。中でも、常楽会の際には「中門行事」、「楽門行事」等の役割が定められ、「左右楽門」で僧侶の集会が行われている。法会を見物する寺僧達は、中金堂院への入場時に中門を利用できなかったという(『細細要記抜書』)。

法会の時には、中金堂院の周辺や内庭部に輦舎や棧敷を仮設することもあった。享保14(1729)の再建事始では、内庭部に輦舎が設けられている(第3図)。これらの施設は竹、縄、板などで造られていた(『養和元年記』『興福寺年中行事』)。1999年度の回廊東北部の調査では、こうした仮設建物の痕跡を内庭部で検出している(『概報Ⅱ』)。



第3図 『興福寺伽藍地曳図』

(奈良県教育委員会『重要文化財興福寺南円堂修理工事報告書』1996)

### 3 遺 構

本調査では中金堂院回廊東南部とその内側にある内庭の東南部分を発掘した。調査区北半と西半は境内整備のための盛土があり、現地表面から遺構面までは比較的深いが、南半では調査前から遺構面が露出していた部分もある。

1998年度の中門、1999年度の回廊東北部の調査では、中金堂院の東北から中門東半へとつづく谷筋を確認した。この谷筋の東側の肩は、本調査区の東北隅から中央をとり調査区の南へ抜けている。今回検出した中金堂院内庭部と南面回廊は谷筋にあたり、谷の西側の肩はみられなかった。断割調査の結果、寺地の造成に際して、谷を周辺の土で一定程度埋め立てた後、埋め立てとは別の土で突き固めながら整地を行っていることが明らかになった。調査区西辺では内庭部の遺構面から約1.6mで谷底(旧地表)に達する。

#### (1) 回廊基壇上の遺構

基壇全体は削平されており、松の植樹による近世以降の擾乱もあり、残存状況は良好ではない。回廊基壇部分の築成は、谷を暗茶灰色の砂質土で厚さ80cm前後埋め立てた後、地山由来の礫混じり橙黄色砂質土を突き固めて水平に整地する。基壇部分は整地上に似た土を整地面より20cmほど積み上げて築成し、その上に粒度の細かい黄灰色土を版築して仕上げている。基壇下の整地土は厚さ約40cm、黄灰色の築成土は現存で15cmほどである。谷筋東側の東面回廊基壇は、礫を含む橙黄色白班砂質土の地山を削り出し、上面に地山由来の土を積み上げ突き固めて築成している。この積み上げ築成土は厚さ10cmほど残存し、地山を直接掘り込んでいる礎石据付掘形の上面を覆っている。



第4図 調査区全景(東南から)

東面回廊SC7500 梁行 2間、南面回廊と交わる東南隅部を含めた桁行 8間分を検出した。調査区北では現地表下約25cm、調査区南では 5 cmほどで基壇上面に達する。遺構面の標高は94.9～95.3mで北が高く南に向かって低くなる。基壇外装地覆石上面との比高差は、最も残りのよいところで約25cm、礎石上面との比高差は40～45cmあり、基壇上面はかなり削られている。

本調査区内の礎石は 2基のみ残存する。いずれも三笠安山岩で、径0.9～1.2mの不整形の自然石を使用している。棟通り柱筋北端の礎石には、抜取穴と非常によく似た暗灰色砂質土を埋土とする掘り込みがあり、抜き取りあるいは据え替えを意図した痕跡が認められるが、礎石の位置は据付当初と変わらないとみてよいだろう。東側柱筋東南隅の礎石は原位置を保つ。そのほかの柱位置は礎石抜取穴として確認した。抜取穴の一部には長さ30～50cmの河原石の根石が据えられた状態で残存し、礎石の破砕片が投げ込まれていた例もある（第 5 図 2）。検出された礎石据付掘形は、長径1.5～1.8m、短径1.3～1.5mの不整形が多いが、隅丸正方形に近い整った形のものもある。断面の観察から、掘形底部に一定程度、土を入れ版築した後、根石を据えていることがわかる。

SX7501は棟通り柱筋に凝灰岩の切石を 2列に並べた地覆石列である（第 5 図 3）。幅約20cmの切石は15cmほど間隔をあけて配列され、各石列は別々の掘形を掘削して据えられている。これは東面回廊北半で検出した地覆石列と一連のもので、回廊中央を通る間仕切りの地覆と地長押を受ける施設であろう。南面回廊SC7416 桁行 4間分を検出した。現地表から10～15cmで基壇に達し、基壇上面の標高は94.9～95.2m、南側は削平され北ほど残りがよい。回廊北辺の基壇外装地覆石上面との比高差は最大で約30cmある。礎石は残存せず、柱位置は抜取穴と据付掘形によって確認した。北側柱筋では据付掘形を覆う基壇積み土が薄く残存している。SC7416の棟通り柱筋にある浅い掘り込みは、凝灰岩片を多く含



第 5 図 東面回廊基壇と基壇上の遺構

1 基壇全景（北から） 2 礎石抜取穴（南から） 3 棟通り地覆石列SX7501（東南から）

むことから、1998年度に南面回廊中門取り付き部で確認した棟通り地覆石SX7423の抜き取り痕跡であろう。回廊基壇幅は東面、南面回廊ともに約10.8m、基壇の出はそれぞれ約1.9mに復元できる。

**掘立柱建物SB8365** 東面回廊の中央部、回廊基壇上に位置する南北棟の建物である。北東隅、南東隅の2柱を欠く桁行5間、梁行2間で、本調査区では建物南半の桁行3間分を検出し、その北半は1999年度調査区に及ぶ。桁行柱間寸法は約4m、梁行は約3.6mある。柱穴の径は約80cm、検出面から約80cmほどの柱穴底部には自然石の礎盤石を据えている。柱穴はいずれも回廊の礎石据付掘形、礎石抜取穴の西辺に位置し、礎石据付掘形を掘り込み、礎石抜取穴によって切られていることから、この掘立柱建物の柱は礎石の西に沿う形で建てられていたと考えられる。

**柱列SA8366～SA8369** SA8366は東面回廊東側柱筋の西側に位置し、南北に並ぶ約3m等間の柱列。SA8366の西側約7mに位置するSA8367も約3m等間の南北柱列である。両者は柱間寸法が等しく、柱位置も東西に対応するので関連する遺構かもしれない。SA8368はSA8366、SA8367の北側に位置し、東面回廊の棟通り柱筋上に約2m間隔で南北に並ぶ柱列である。この西側に並列する形でSA8369がある。両者とも柱列の北端は1999年度調査区に及び、掘立柱建物SB8365の柱穴を切り込んでいる。

**土坑SK8371～SK8373** 東面回廊の西側柱筋上で基壇を掘り込む土坑を検出した（第6図3）。SK8371～SK8373は不定形で、長さ2～3m、幅2mほどある。いずれも近世の土器、近世後半に属する瓦が含まれている。土坑は礎石据付掘形を避けて掘り込まれていることから、掘削当時、礎石は存在していたと考えられる。

上述の掘立柱建物、柱列、土坑は、位置や出土遺物の年代などから、回廊の建物が存在する時期のものとは考えにくく、中金堂院最後の火災である享保2年（1717）以降につくられたものと推定する。



第6図 南面回廊基壇と東面回廊基壇上の遺構

1 南面回廊基壇（西から）

2 南面回廊基壇（東から）

3 東面回廊基壇上の土坑（東南から）

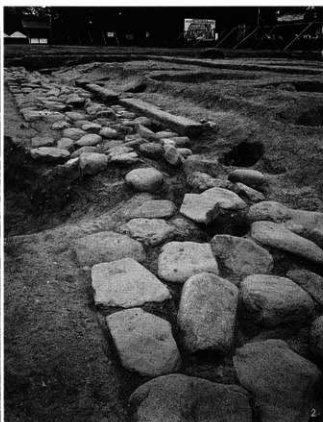


## (2) 基壇縁と外周の遺構

東面回廊の東側は現代の排水溝によって破壊されており、石材はすべて抜き取られていた。南面回廊南側は、埋土に近世以降の軒瓦片や陶磁器片を含む溝SD8385によって壊されている。溝の南岸には雨落溝あるいは石敷の材と思われる河原石が遺棄されていた。近世の遺物を含む東面回廊西側の溝SD8383、南面回廊北側の溝SD8384の下で基壇外装、雨落溝、石敷を検出した。

**基壇外装SX7502・SX7418** SX7502は東面回廊基壇の西縁基壇外装で、北半の残りがよく、南半はほとんど抜き取られている。南面回廊北縁のSX7418の残存状況は良好である。いずれも凝灰岩の切石を用いた基壇外装で、地覆石と羽目石の一部が残存している。地覆石は幅20～25cm、長さ37～50cmの切石で、上面は平坦に仕上げているが、羽目石を組み合わせる仕口や東石をはめるほぞ穴はない。凝灰岩には硬軟の差が認められ、風化の度合いも一様ではない。羽目石はすべて軟質の凝灰岩で、下端部に切り欠きを施して地覆石の背面に落とし込んでおり、その下端部のみが残存している。基石は確認していないが、外装全体は東石のない壇上積基壇であろう。SX7502地覆石上面の標高は、94.95～95.06mと南に向かってゆるやかに傾斜し、SX7418は94.83～94.90mで西に傾斜する。

**雨落溝SD7503・SD7420** 基壇外装地覆石の内庭側に沿って構築された石組みの雨落溝。東面回廊西側のSD7503と南面回廊北側のSD7420の規模と構造は同様で、径20cm前後の河原石を2列に敷き並べ、幅約40cmの溝底を形成する。溝の内庭側には河原石を立てて側石とし、基壇側は基壇外装の地覆石を溝の側壁とする。SD7503底石上面の標高は94.85～95.00m、SD7420は94.78～94.88mで、基壇外装の地覆石と同様に、北から南、東から西へ向かってゆるやかに傾斜している。地覆石上面と雨落溝の底石上面との比高差は5～8cm、側石上端との差は8～15cmある。



第8図 東面回廊西側の基壇外装と外周遺構

1 基壇外装と外周遺構の全景（北から） 2 基壇西側の石敷SX7504（西南から）

**石敷SX7504・SX7421** 東面回廊西側のSX7504は、基壇外装と同様に北半ほど残りがよく、南面回廊北側のSX7421は、東半の残りが比較的良好である。SX7504は内庭側の面をそろえて見切りとし、溝側は雨落溝の側石を基準にして径20～40cmの河原石を4列に敷き並べ、溝側にわずかに傾斜させる。雨落溝の側石を含む幅は約90cmある。後述する廃棄土坑SK8395の東側では凝灰岩を敷いているところもあり、部分的な補修と考えられる。SX7421は内庭側の見切石1列の残りはよいが、そのほかの敷石は側石とともに抜き取られている。雨落溝SD7420との関係を見ると、SX7504と同様の規模と構造とを有していたと考えるが、SX7504に比べ石が小ぶりで石と石の間に隙間が目立つ。雨落溝の側石や敷石の抜き取穴から中世の遺物が出土している。

**暗渠SD8380** 雨落溝SD7503の延長線上に位置し、南面回廊基壇を南北に貫通し、基壇南側溝に連結する。同位置で数度の溝の掘り直しが観察され、溝埋土からは中世から近世の土器片、陶器片や瓦片が出土する。蓋石や側石、底石は残っていないが、溝埋土最下層には凝灰岩の細粒や砕片が含まれており、元来は凝灰岩切石を組み合わせた暗渠であったことがわかる。暗渠北端には凝灰岩の切石片が残存し、切石上面の標高は雨落溝SD7503の底石と一致することから、雨落溝に合わせて掘えられた暗渠への入水口であろう。

**溝SD8381** 回廊東南隅から南へのびる石組みの溝（第9図3）。東面回廊東側の現代溝の下層で検出した。遺構の掘形北端は南面回廊南側の溝SD8385の南辺に位置し、南端は調査区外へつづく。幅約1.3mの掘形中央に径20cm前後の上面平坦な石を2列に敷き並べて底石とする。西辺には溝側の側面を垂直に加工した石を据えて側石とする。溝東側の側石はすべて失われているが、抜き取穴が確認された。側石に挟まれた溝の幅は約40cm、底石上面の標高は94.37mあり、側石上面は底石より15cmほど高い。



第9図 南面回廊北側の基壇外装と外周遺構

1 基壇外装と雨落溝（東北から） 2 基壇外装と外周遺構（東から） 3 溝SD8381（東南から）

**階段SX8382** 本調査区の北端近くで検出した、東面回廊SC7500西辺の階段である。段石や階段の築成土は残存していないが、調査区北端にある基壇外装SX7502の地覆石の西側に接する形で凝灰岩の切石が据えられており、雨落溝SD7503はこの切石を迂回して西側に張り出している（第11図）。雨落溝SD7503の東辺には長条形の抜き取り痕跡を検出した。基壇外装西側の切石は階段北側の羽目石をのせる地覆石で、雨落溝東辺の抜き取り痕跡は階段前面の地覆石にあたとみられる。

階段北側の羽目石をのせる地覆石は長32cm、幅30cmあり、地覆石の長さから階段の出は約30cmとわかる。階段南側の羽目石をのせる地覆石は残存していないが、雨落溝SD7503が屈曲する位置を階段の南側と考え、その位置に北側と同様の地覆石を想定した場合、階段地覆石の外面間は約4.5mに復元できる。階段の位置と幅は、階段の東側に位置する東面回廊の桁行柱間1間分に相当することから、階段に対応する門の位置を明らかにすることができる。

回廊基壇高の復元を試みる。調査区の北端に残る礎石上面の標高95.64mと、基壇外装SX7502の北端に位置する地覆石上面の標高95.05mとの比高差は0.59mある。礎石上面が基壇上面よりも2寸ほど高かったと仮定し、さらに基壇端までの水垂れ勾配を1寸ほどと見積ると、葛石上面の標高は95.55mとなる（1寸=3cmで計算）。以上から基壇高は約0.5m（1尺7寸）と推定される。この基壇高であれば段石1段で基壇上面に登ることが可能であろう。段石は地覆石に直接のせるものとし、1尺角程度と想定すると、階段の出とも整合する。葛石の厚さは7寸ほどとなる。仮に階段前面を通る雨落溝の上に渡りのための板石があり、その厚さを3寸とすれば、段石の観上げの高さは7寸となり、葛石の観上げとも一致する。階段両側の羽目石や耳石も含めた復元案を第21図に示した（22ページ）。

東面回廊西辺の基壇外装SX7502は、階段の幅に対応する範囲の地覆石が抜き取られている。階段北

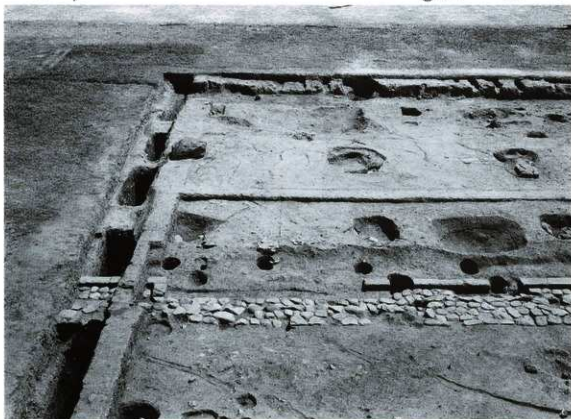
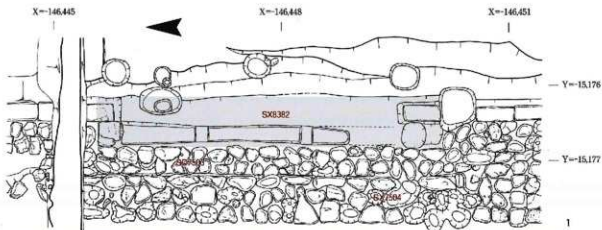


第10図 階段（東北から）



の地覆石や、その東に接する基壇外装の地覆石は、抜き取り痕跡を切る形で据えられている。このことから、階段は基壇外装の地覆石を抜き取った後に構築したことになる。これについては基壇外装の地覆石をいったん通した後に、階段構築のために地覆石を抜き取るという一連の工程の中での状況とみるか、階段のない時期があり、後に階段を新たに構築するという時期差とみるか、現状ではどちらとも決し難い。中門北側や中金堂においても、凝灰岩の切石で構築された階段が検出されているが、いずれも雨落溝や石敷とともに明確な改修の跡が認められた。本調査で検出した階段の時期については、既往の調査成果を考慮したうえで検討する必要がある。

回廊の階段としては興福寺食堂の西側に取り付く軒廊の事例がある。軒廊の北側に位置し、幅は約12尺あり、凝灰岩製の延石、地覆石と段石が1段残存している。周辺の雨落溝や石敷などは検出されていない（奈良国立文化財研究所『興福寺食堂発掘調査報告』、1959年）。



第11図 階段  
1 階段遺構平面図（1：50） 2 階段（西から）

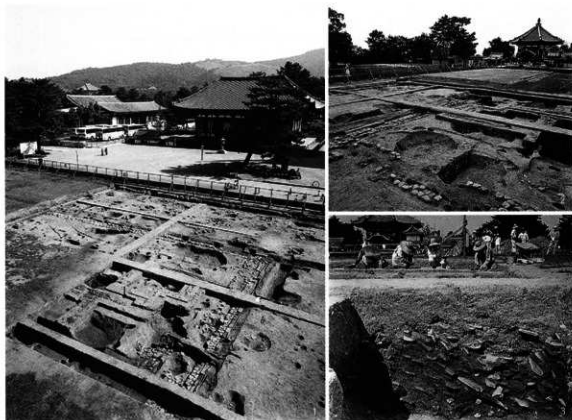
### (3) 内庭部の遺構

回廊に囲まれた中金堂院内庭部に相当する。表土を取り除くと近世以降の建物遺構が検出された。近世の瓦片、土器片を含む茶灰色砂質土の包含層を30cmほど下げると、近世以前の遺構が検出される遺構面に達する。内庭面にはごく薄い白色砂の層がひろがり、瓦片が埋め込まれた部分が一部にみられる。多くの溝や小穴を検出したほか、大型の廃棄土坑が南面回廊北側に集中している。

**廃棄土坑SK8390～SK8396** 土坑の形状は不定で、規模も径2～5mと一定ではない。SK8390～SK8396は大量の瓦とともに赤褐色の焼土が含まれており、火災時に生じた廃棄物を処理した土坑であろう。SK8390～SK8393からは奈良～平安時代の軒瓦が出土し、SK8395からは奈良時代から中世の軒瓦が出土している。完掘しているわけではないため推測の域を出ないが、これらの土坑には時期差があると想定できる。中世以降のSK8395は石敷SX7504を壊し、埋土に石敷の敷石と思われる石が含まれている。

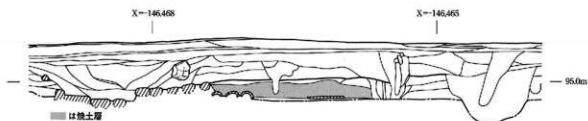
**瓦敷地業SX8403** 本調査区西辺の断削調査で、内庭部の白色砂層を取り除くと赤褐色の焼土層が検出され、この層に覆われるように大量の瓦が出土した。焼土層は20cmほどの厚みがあり、瓦はその下半から出土する。丸瓦、平瓦が多く、軒丸瓦、軒平瓦も含まれている。瓦は黄色マンガン斑の内庭部整地土の上に置かれ、向きは不揃いだが西半に平瓦がまとなり、東半では丸瓦が上下に重なる(第14図1)。土圧により破砕しているが完形に復元できるものが多い。古代の丸瓦、平瓦がほとんどで、軒瓦はすべて奈良時代である。

瓦の出土状況からすると、回廊屋根からの崩落や単なる遺棄とは考えにくい。焼土層は石敷SX7421北辺から1.8mほど北の瓦が出土する範囲に限られ、南はSX7421の下にもぐり込んでいる。焼土層上面の標高は内庭の遺構面と一致することから、火災後この部分を削り込み、瓦を敷き焼土をかぶせた



第12図 内庭部の遺構

- 1 内庭部全景(西南から) 2 内庭部東南隅(東北から) 3 廃棄土坑SK8390の瓦堆積状況(東から)



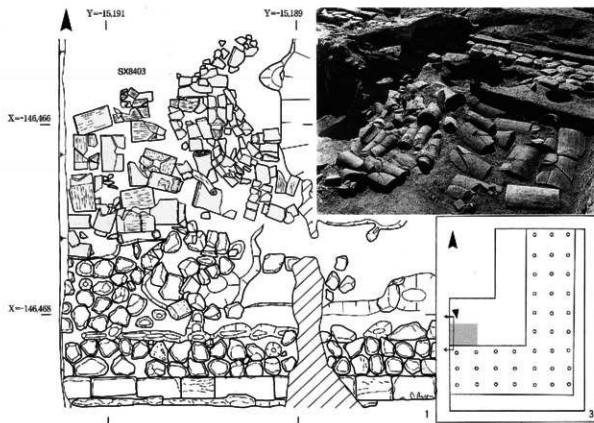
第13図 調査区西壁断面図部分(1:40)

後に石敷SX7421を敷設したことがわかる(第13図)。

**柱列SA8404** 廃棄土坑SK8395の西側に南北に並ぶ柱列。柱筋や柱間は一定ではないが、径40cm前後の柱穴内には完形の丸瓦が縦に据えられ、自然石の礎盤を据えている。恒常的な建物の柱穴とは考えにくく、法会時に幢などを立てた穴の可能性はある。

**仮設建物SB7536** 廃棄土坑群の北にある南北棟の礎石建物で桁行6間分を検出した。1999年度の調査で確認した礎石建物の南半部にあたり、既調査分と合わせて桁行12間、梁行2間の建物となる。礎石は一辺30~40cmの方形で上面を平らに加工した切石で、礎石の心心間の距離は1.95mある。近世後半の瓦を含む包含層上にあり、1999年度調査で示された明治時代以降という年代観とも矛盾しない。

**建物SB8406** 内庭南半部に位置し、長さ20cm前後の不定形石を地面に敷き並べる。この東には東に伸びる丸瓦列があり、建物の基礎と思われる。雨落SX8407はSB8406の西側にあり、南北に伸びる幅約50cmの施設で、破砕した平瓦を木端立てして長条形につくる。南側と西側には瓦片を平置きした施設が取り付け。建物SB8406にともなう雨落と考える。丸瓦列SX8408は建物SB8406の東側に南北に伸びる施設。瓦幅よりわずかに広い幅の浅い掘り込みをして据えている。区画施設と思われる。



第14図 瓦敷地帯の瓦出土状況

1 出土状況平面図(1:40) 2 出土状況(北西から) 3 平面図と断面図の位置

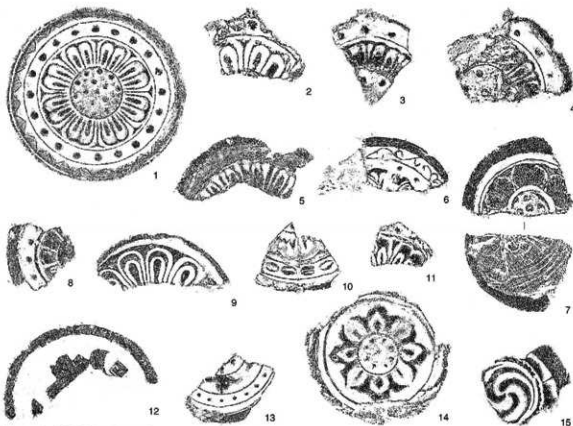
## 4 出土遺物

### (1) 瓦

今回の調査で出土した瓦は軒丸瓦111点、軒平瓦128点、丸瓦約14000点、平瓦約30000点、道具瓦14点、瓦の時期は興福寺の創建期から近世までに至る。以下、古代の軒瓦について概述する。

**軒丸瓦** 1は6301Aで興福寺創建の軒丸瓦である。瓦当面径は18.6cmあり、瓦当側面には范端の痕跡、瓦当裏面には布目がみられる。6301型式は計12点出土した。このうち6301Aと認定できたのは計10点あり、范傷はほとんどない。范端痕跡があるものは計3点、瓦当裏面の布目痕跡がみとめられたのは計4点ある。2は久米寺式の6271型式で、瓦当裏面に布目はみとめられない。以上は興福寺創建時の瓦であろう。3、4は外区外縁素文、内縁珠文の東大寺式6235型式で奈良時代後半の瓦である。

5は単弁蓮華文で『興福寺防災施設工事・発掘調査報告書』（興福寺、1978年）の19に類似する。6は外区に唐草文と珠文を飾る蓮華文、7は外区に圏線を1本めぐらす花卉で、瓦当裏面に布紋り目がある。以上は平安時代前期から中期の瓦であろう。8は外区珠文帯の単弁蓮華文、9は外区の狭い単弁蓮華文である。10は外区に紡錘形の珠文帯がめぐる複弁蓮華文で、播磨産の可能性ある（上原真人『院政期播磨系瓦屋の成立年代とその背景』『第5回京都府埋蔵文化財研究会発表資料集』京都府埋蔵文化財研究会、1997年）。11は外区珠文の複弁蓮華文。12は梵字「アク」か「アーク」の正字である。13は外区珠文帯の四葉宝相華文で薬師寺86『薬師寺発掘調査報告書』奈良国立文化財研究所、1987年）と同范、14は圏線緑の宝相華文で薬師寺87と同范である。15は外縁に花卉と細かい刻み目の圏線を飾る三巴文。以上は永承再建以降、治承の兵火以前の軒丸瓦であろう。

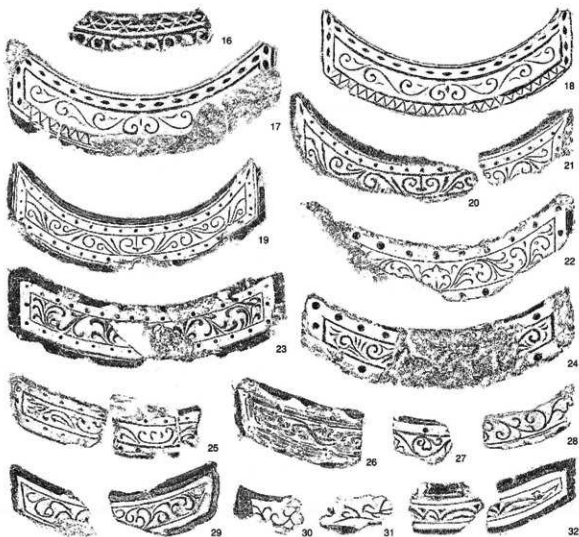


第15図 出土軒丸瓦 (1:4)

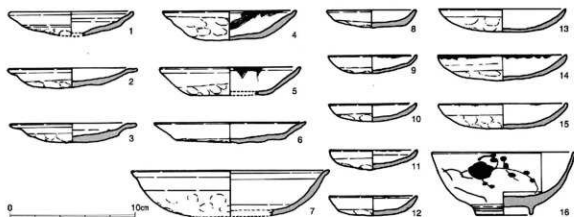
軒平瓦 16は6561Aだが、下端に指捺りの文様帯がない。17は6301Aと組む興福寺創建の6671Aで、段頸である。6671Aは計19点出土した。頸の長さは5～11cmまでの幅があり、8cm前後のものが最も多い。18は6671Lで、頸前端に幅1cmの頸面をもつ曲線頸Ⅱで珍しい。このほかに6671型式と確認できるものが10点ある。19は6682Dで計8点あり、これまでも興福寺で出土している型式で、平瓦部凸面に縦縄タタキと萱負いの朱が残る。すべて廃棄土坑SK8390から出土している。20は6682Gで、興福寺で既出。21は6667Aで法華寺に同范例がある。以上は奈良時代前半に属する。

22は6732Eで東大寺創建期の軒平瓦、23は西隆寺創建期の6739Aで、内区右上隅に范傷がある。3点あり、すべて廃棄土坑SK8390から出土した。24は6763Cで過去に興福寺からの出土例がある。25は6711Bで平城宮に同范例がある。以上は奈良時代後半の瓦である。

26は残存状態が悪いが、珠文縁の偏行唐草文で段頸につくる。平安時代前期から中期の瓦であろう。27は珠文縁の偏行唐草文で、薬師寺277に類似するが異范である。28は素文縁の唐草文で段頸。29は素文縁3回反転の唐草文で、薬師寺264と同范である。瓦当部右上角を斜めに面取りしている。30は唐草文で曲線頸、31は素文縁の植物文で曲線頸である。32は波状に配した植物文で低い段頸である。以上は平安時代後期、おそらく永承年間の再建以降、治承の兵火以前の軒平瓦であろう。



第16図 出土軒平瓦 (1:4)



第17図 出土土器（1：3）

## (2) 土 器

興福寺境内の一連の調査において、発見された土器の出土量は多くない。今回の調査区は回廊の外側を含み、とくに南面回廊の南側を中心に、鎌倉時代から室町時代かけての土器がめだって出土した。また、内庭部に位置する廃棄土坑や内庭部上層の包含層では、平安時代と江戸時代の土器が多く出土した。興福寺は長年にわたって法灯を保ちつづけてきた寺院である。本来、境内は清浄に保たれるべき場所であるので、土器などを投棄した土坑は火災直後の廃材を処理するための短期的な使用であったと想定される。これらの土坑から出土した土器は、興福寺の年表を照らし合わせることができるといふ点で、南都における古代から近世にかけての土器編年を考えるうえで重要な資料である。

比較的材料として出土した資料について概説する。焼土を含む廃棄土坑SK8395からは土師器皿が出土している。いずれもやや赤みを帯びた淡褐色を呈し、11世紀後半の様相を示す。1～3は器高が低く、いずれも強いヨコナデで口縁部を引き出し、口縁端部を丸くおさめる。底部外面はゆるくナデ調整を施しているが、指頭圧痕が残る。4～6は平らな底部とまっすぐに広がる口縁をもつ。口縁端部は比較的強いヨコナデが施され、やや外反する。全体的にナデ調整で仕上げられているが、底部には指頭圧痕が残る。4、5は油煙の痕跡が残る灯火器であろう。7は比較的大形の皿。口縁端部はヨコナデされ外反する。外面は比較的丁寧にナデ調整を施すが、指頭圧痕が残る。

内庭の遺構面上に堆積する茶灰色砂質土の包含層からは江戸時代の土師器皿、陶磁器がまとめて出土した。土師器皿はいずれも淡茶褐色で、焼きしめられている。大小2種の規格がある相似形で、斉性が高い。8～12は径約7cm、器高約1.5cmの小皿で、8以外は油煙の痕跡が残る。13～15は径約10cm、器高約2.0cmの皿で、14、15は油煙の痕跡を残す。大小の土師器皿ともに、灯火器として用いられていたことがわかる。16は染付の茶碗で、見込みに無軸の重ね焼き痕を残す。

## (3) 銭貨・金属製品

調査区内の土坑、溝、礎石採取穴、包含層、表土から合わせて82点の銭貨が出土した。銭種の判明する75点のうち、3点が北宋銭（熙寧元寶1・元符通寶1・元豊通寶1）、46点が寛永通寶、3点が文久通寶で、18点が明治時代から昭和20年にかけて通用した銅銭（半銭6・一銭8・二銭1・五銭1・五十銭2）、5点が現在通用している硬貨（五円2・十円3）であった。

鉄製、銅製の金属製品が合わせて69点出土している。鉄製品の多くは釘で、49点ある。銅製品には鋳造品の小片や、鋸などの飾金具や銅針金などがある。

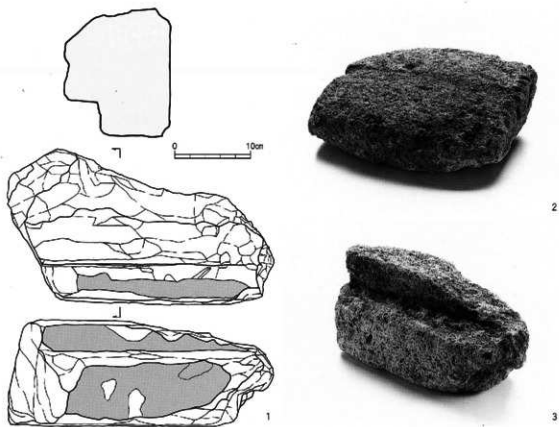
#### (4) 石 材

石材は回廊基壇外装の地覆石と羽目石を中心に、21点が出土した。石質は凝灰岩が中心で、軟質の流紋岩質凝灰岩角レキ岩（二上山～ドズルポー産。以下、凝灰岩A）と、硬質の流紋岩質溶結凝灰岩（奈良市地獄谷周辺産。以下、凝灰岩B）に大別できる。主に内底部上層の包含層から出土した。

**回廊地覆石** 地覆とみられる石材は10点あり、1点をのぞいて凝灰岩Bである。断面寸法は幅19～22cm、厚み7～9.5cmで、計画寸法は幅7寸、厚み2.5～3寸ほどみなせる。長さは27～30cmで、回廊基壇縁に残る地覆と比べると短めである。上面と推定される面には、幅8.5～16cmの風蝕があり、残り8.5～10.5cmは平滑な加工面を残す。幅7寸のうち4寸が露出し、3寸に羽目石がのる構造が想定される。地覆石01(第18図2)は出土位置不詳だが、凝灰岩Bで6面すべてに加工面が残る。幅22cm、厚7cm、長27cm。上面の幅12.5cmに風蝕が確認され、残り9.5cmの平滑面に羽目石をのせたと推定する。

**回廊羽目石** 羽目石とみられる石材は9点あり、いずれも凝灰岩Aである。地覆石との仕口の形状は、羽目石の裏から厚み6～8.5cm、高さ3.5～5.5cm以上の突部を残して表側を欠き取り、地覆石の基壇内側面にのせる構造となる。突部の設計寸法は厚み2寸以上、高さ1.5寸以上と推定する。羽目石の厚みは地覆石上面の風蝕差を考慮して、6寸程度であったと推定しておく。羽目石02(第18図1・3)は、清SD8383出土。幅32cmで地覆石仕口の突部が残り、厚7.5cm、高4cmを地覆石表面にはめ込んだと考える。地覆石に接する加工面は平滑に仕上げられており、下端面と裏面はやや粗い加工面が残る。

**回廊基壇外装の復元** 遺構の地覆石には凝灰岩A・Bが混用されている。凝灰岩Aが当初材、凝灰岩Bは改修時の補填と考えられる(『概報II』)。羽目石は遺構・遺物ともに凝灰岩Aである。回廊基壇では仕口を羽目石側だけに施しており、加工性の高い凝灰岩Aが用いられたものと考えられる。



第18図 石材

1 羽目石02実測図(1:5) 2 地覆石01(上面手前が風蝕面) 3 羽目石02(写真は羽目石裏面が下)

## 5 回廊の柱間寸法と「楽門」

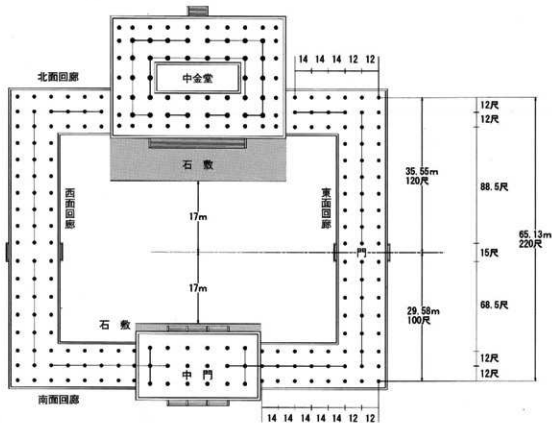
ここでは、これまでの調査成果とあわせて回廊の柱間寸法と門の位置について検討してみたい。

**柱間寸法** 南面回廊SC7416の桁行柱間寸法は約4.1m、梁行柱間寸法は約3.5mであるから、既に調査した北面回廊SC7510の柱間寸法、桁行4.16m(14尺)、梁行3.55m(12尺)と一致するとみてよいだろう。今回検出した桁行柱間は隅部を含めて7間で、『流記』にいう「南門左右各七間」とも矛盾しない。

東面回廊の柱間寸法については『概報Ⅱ』において、北隅部をのぞく東面回廊北半の桁行7間が12.7尺等間であることを明らかにした。しかし東面回廊の桁行柱間が12.7尺等間では、『流記』所引の「宝字記」にある東面回廊の全長22丈2尺と合わない。そこで『概報Ⅱ』では『興福寺建築諸図』所収の回廊平面図を参照し、南北隅部を除く東面回廊の桁行13間のうち、北から8間目に柱間14尺の小間があり、門の北側が7間×12.7尺、南側が5間×13.8尺であると推定した。

『流記』に「東西各十七間（隅部を含む）とあるのは今回の発掘成果と一致する。東面回廊の全長は、東側柱筋北端（回廊北東隅）の礎石と、今回発掘した東側柱筋南端（回廊南東隅）の礎石との心間で65.13mある。これを『流記』にある全長22丈2尺で除すると1尺=0.2933mとなり、大宝令小尺0.2950～0.2963mの範囲に収まらない（井上和人「平城宮造営尺長について」『奈良国立文化財研究所年報 2000-Ⅲ』、2000年）。そこで仮に1尺を0.2957m(0.2950と0.2963の中間値)として65.13mを除すると220.3尺となる。回廊の全長は『流記』の記載と異なり220尺で設計施行されたと推定すると、1尺の尺長は0.2960m [65.13m÷220尺] であることになる。

つぎに今回検出した階段の中軸線と門の柱間の中心が一致すると想定して、階段の中心軸の座標と



第19図 回廊柱間寸法および門の中軸線



門北に位置する礎石の心との距離を測ると221mとなり、門の柱間寸法4.42m [0.2960m×15尺=4.44m] を得ることができる。回廊北東隅礎石心と門の中軸線との距離は35.55m[0.2960m×120尺=35.52m]、回廊南東隅の礎石心と門の中軸線との距離は29.58m [0.2960m×100尺=29.60m] である。門以北の桁行柱間寸法は、北隅部桁行2間の24尺と門15尺の北半7.5尺を120尺から引くと88.5尺、これを7間で割ると12.64尺となり、門以南では南隅部の24尺と門の南半を100尺から引いた68.5尺を5間で割った13.70尺となる。「楽門」の位置 東面回廊の設計について『概報Ⅱ』では門の位置と規模を決めてから、その南北を等間割りしたと推測している。そこで今回確定した門の設計上の重要性に注目してみたい。先にみたように、東面回廊の寸法は門の中軸線を境に以北が120尺、以南が100尺になる。この数字からみても門が回廊設計の基準になっていることがわかる。この中軸線を内庭側にのぼすと、中金堂前庭部にある石敷SX7550の南辺と中門北の石敷SX7421北辺との間の距離34mを17mに等分する位置に当たる。

『興福寺供養次第』には「東西楽門〈回廊中央戸〉」とあるから、今回位置を確定した門が「楽門」であることは間違いない。「楽門」の中軸線が中金堂前と中門北側の石敷の間を2分する位置にあることから、「楽門」と両石敷はいずれかが基準となって設計された可能性がある。中金堂前の石敷南端（見切石）が文献にみえる「砌」であることは既に指摘されている（『概報Ⅲ』）。『中右記』にも「中門北砌」とあり、これが中門北側の石敷の見切石を指すのか、今後検討すべき課題であろう。

さらにこの中軸線を西と東に延長すると、東金堂前の灯籠と西金堂跡前にある灯籠の中心点（東西金堂の中軸と考える）に一致する。「楽門」の位置は単に回廊設計の基準というだけでなく、中金堂院全体あるいは院周囲の建物とも関連していたことがうかがえる。

「楽門」と東西金堂との関係は中世の中金堂院を描いた絵図にもみることができる（第22図1）。



第20図 階段と東金堂（西から）

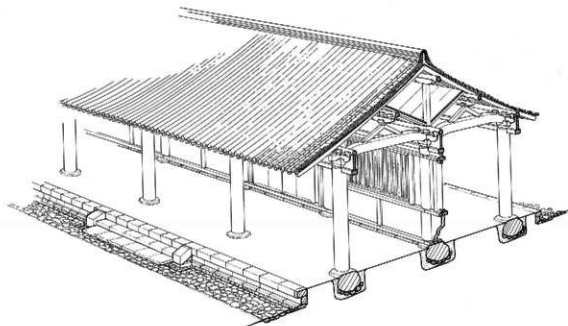
## 6 結 語

**回廊** 1998年度、1999年度の調査とあわせて南面回廊の東半と東面回廊を全面発掘した。回廊の規模は『流記』の記載とおおきく矛盾することではなく、火災後の回廊の復興事業が、創建の規模を踏襲して行われてきたことをあらためて確認した。また東面回廊の門を境に南北で桁行柱間寸法が異なるという『流記』にはない事実を明らかにし、礎石位置の変更がないことからみて、それが回廊の創建当初からの設計であることを確認した。

**基壇縁と外周** 今回検出した凝灰岩切石の基壇外装・河原石組の雨落溝と石敷は、中門北の基壇外周B期（『概報Ⅰ』）と、東面回廊北半西側にある外周施設（『概報Ⅱ』）と、位置・規模・構造とも一致することから、一連の仕事であろう。このうち中門北側や東面回廊北半西側の石敷の下には、廃棄土坑や足場穴が検出され、今回も石敷敷設前に瓦敷地業を行っていることから、この外周施設は、創建当時のものではないことは明らかで、敷設の時期については今後の検討課題となろう。また、おなじく河原石をもちいる中金堂前庭部のⅡ期石敷（『概報Ⅲ』）との関係も追究する必要がある。

**階段と門** 東面回廊の基壇西辺で階段を確認した。2段に復元できる階段は、基壇外装の地覆石を抜き取った後に築成している。基壇縁や外周の施設と一連の仕事であるのか、あるいは階段のみ後世に付設したのか、明確な証拠を得ることはできなかった。階段は東面回廊の柱間1間分に対応し、この柱間はほかの柱間よりも寸法を大きく設定していることから、回廊に開く「楽門」の位置を知ることができた。さらに「楽門」の位置が回廊を設計する際の基準となり、中金堂や中門の石敷、東西金堂とも密接な関係があることが明らかになった。

**内庭部** 火災後の瓦を廃棄した土坑が検出された。創建期から平安時代までの瓦を含む廃棄土坑が多く、中世以降の瓦を含むものもある。いずれも内庭部の東南隅に集中しており、中金堂前庭部、中門北、「楽門」の門前など、内庭部の主要な位置を避けて廃棄しているとみられる。調査区西辺で検出した瓦敷地業は、内庭の一部を改修したことを示している。



第21図 回廊建物復元図



第22図 『春日社寺曼荼羅』 室町時代初期（大阪市立美術館蔵） 本文4・21ページ参照  
 1 中心伽藍部分 2 絵図全幅 3 東面回廊の南門 4 西面回廊の南門

## 報告書抄録

ふりがな	こうふくじ だいいっきけいだいせいびじぎょうにともなうはっくつちようきがいはうし							
書名	興福寺 第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報Ⅳ							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編者名	今井見樹・金子裕之・井上和人・長尾充・神野恵・山本紀子							
編集機関	独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所							
所在地	〒630-8577 奈良県奈良市二条町2丁目9-1 Tel 0742-34-3931							
発行者	興福寺							
所在地	〒630-8213 奈良県奈良市登大路町48番地 Tel 0742-22-7755							
発行年月日	西暦 2003年 3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東緯 ° ' "	調査機関	調査面積 ㎡	調査原因
こうふくじ 興福寺	きょうふくじ 奈良県奈良市 のぼりだちろ 登大路町	29201	—	34度 40分 48秒	135度 51分 46秒	2002.7.1 ) 2002.11.1	981	境内整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
興福寺	寺院	奈良時代 ) 明治時代	回廊 石敷 廃棄土坑	瓦 土器 銭貨		東面回廊・南面回廊の規模を明らかにした。回廊に取り付け階段を検出し、回廊に開く門の位置を確認した。中金堂院内庭東南部の様相を解明した。		



---

2003年3月20日 印刷

2003年3月31日 発行

### 興福寺

第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報Ⅳ

編集 独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所

発行 興福寺

〒630-8213 奈良市登大路町48番地

印刷 (有)関西プロセス

---